

柳田国男の農村福祉論

常磐大学大学院 宋 金文

本報告は、柳田国男の農政学などの農村研究に対して、「福祉」の視点から、農民の「貧困」問題、そして農家の家族（家）変動に関する彼の見解を検討し、その農村福祉への関心の所在と内容を明らかにしたうえで、合わせてその現代における意義を検討しようとするものである。

本報告の構成としては、まず近代における農民の貧困に対する柳田の認識、そして小農がなぜ組合的共同をしなければならないかという柳田の主張から、その農村研究の問題関心を明らかにする。柳田は近代における小農の貧困は産業化のもたらした構造的な貧困と、伝統的な相互扶助関係を喪失した孤立的貧困という二つの性格を持っていると指摘している。そしてまだ自立できていない小農に対して、その生産の自立と共に、小農の助け合い、特に伝統的なムラ・家結合の共同の経験から生まれた「公共心」、「俠義心」による共同を主張する。また、小農の自立を国民全体の幸福のなかに位置づけるのは特徴的である。

次に、柳田の家族論、つまり農民がどういう風に生活してきたのかの中身を考察し、とくに小農の家制度とその変化の論述から、彼の農村福祉論の輪郭と内容をつかみ、その家族の理解の真実に迫る。柳田は農家の家族をまず労働の組織として捉えている。大家族、長子家督の家制度、そして近代の小家族の何れも農家の生活のための労働・生産の結合・共同形態である。そのなかで、家族関係がさまざまな特定な形で結ばれ、その家が、生活の永続体と先祖信仰の場という性格をもつようにもなっていた。しかし、そのような家制度（本家・分家などの同族的、社会的関係も含めて）は、土地とその人口規模の変化によって、或いは近代の産業の発展、職業選択の自由や幸福を追求する家族の意識変化によって、徐々に崩れてきていた。近代小家族の孤立化が進むに連れて、小農を貧困に陥れる危険性も増大している。

また、家は生活の保障単位でもある。同じ家のメンバーであれば、たとえ下人であっても、共同労働の成果を享受する権利をもっており、その生活が家によって保障される。ところが、家の分解にともなって、今までの家の包括的な生活保障機能が期待できなくなり、家族は個として多くの不安に直面しなければならなくなる。

以上の考察に基づいて、最後に、柳田の家族論と農村福祉との関連を指摘し、その現代福祉における意味を分析する。とくに現在の農家家族の福祉問題や生活の不安などを、柳田の提起している小家族の問題と組合的共同との関連において考察する。

柳田の農村福祉論には、農民の個の生産の自立を目指すと同時に、とくに農民の共同的助け合いによって、農民の福祉、農民の生存の自由と権利を求め、その常民としての文化を保っていく内容が含まれている。本報告は、不十分でありながらも、その示唆するところを考察したのである。